



Title	犬の視点から語る／騙ること：吠えなかった人類学者の応答
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	Quadrante, 22, 137-140
Issue Date	2020-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79049
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	On representing dogs perspective.pdf



◆編者からの応答 2 ◆

犬の視点から語る／騙ること —吠えなかった人類学者の応答—

On representing dog's perspective: A response from the anthropologist who did not “bark”

近藤 祉秋
KONDO SHIAKI

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Hokkaido University, Center for Ainu and Indigenous Studies

キーワード

境界 コスト 犬の死 犬ぞり 語り／騙り

Keywords

boundary; cost; death of dogs; dog mashing; representation

原稿受理日：2020.1.31.

Quadrante, No.22 (2020), pp.137-140.

多忙な中、『犬からみた人類史』（以下、本書と表記する）を読み、書評を寄せてくれた3名の評者に共編者の一人として謝意を表したい。

伊東剛史氏による批判への応答から始めよう。禁忌を通じて犬との言語的な境界を積極的に作り出そうとしていた内陸アラスカ先住民のハビトゥスを論じた筆者（10章）は、逆に現代（日本）の「人と犬の間の境界が明示的、安定的、固定的になった」と捉えているのではないかという批判をもらった。続けて、伊東氏は本書の序章に言及し、現代においても「犬と人の境界がますます分からなくなっている」（本書20頁）と考えるべきだとしている。

改めて確認するが、（過去にも境界の曖昧さは別の姿で存在していたが）現代においても「犬と人の境界がますます分からなくなっている」という大きな見立てに筆者は賛同している。そもそも筆者は伊東氏が引き合いに出す序章の共著者でもあるのだが…。多様な時代・地域・主題を扱う本書全体で伝えたいメッセージとして、過去にも現代でも、そしておそらく未来においても揺らぎ続ける犬一人の境界

という視点は重要なものだと筆者も考える。

しかし、伊東氏の言葉を借りれば、時代・地域ごとに「アンビバレンスを含む」、犬一人の境界の多様な揺らぎ方を真剣に受け取るならば、現代日本でヘゲモニックな位置を占める「かわいい（だけの）犬」言説に対してささやかな異議申し立てをすることも必要なのではないかと思う。筆者は、犬に話しかけるのを禁忌としたアラスカ先住民と比べて、「現代の私たちが犬と生きるあり方がいかに人間と動物の分断に基づいているかが逆に浮き彫りになる」（本書250頁）と書いた。そう書いたのは、現代日本においては「人と犬の間の境界が明示的、安定的、固定的になった」と理解しているからではなく、現在生じているとされる犬一人の境界の揺らぎ方を相対化する視点を獲得するために別の揺らぎ方を基準として考えてみればこう見えるのではないかという解釈を提示したかったからだ。

筆者が問題としているのは、過去にも現代にも、おそらく未来においても様々なやり方で揺らぎ続ける犬と人の間の境界に関して、ある種の揺らぎ方が当然視される中で、別の揺ら



ぎ方が「残酷」や「動物虐待」という言葉とともに抑圧されるような世界を私たちは生きていることだ。筆者は愛玩犬を溺愛する個々の人々を批判するつもりは毛頭ない。何せ、内陸アラスカ先住民の友人もチワワを飼っている（本書235頁）。あえて言おう、やはり「かわいいは正義だ」。ただ、筆者が（犬になり代わることなく）人間の言葉で一部の人々に伝えたいのは、様々な犬との付き合い方をする他者の世界へのささいな想像力を持つことが肝要だという単純なことである。

最近、狩猟は「残酷」で、犬ぞりは「動物虐待」にあたるという考え方を持った学生が少なからずいることを前提として大学での講義をしなければいけないことに驚愕した経験がある。「狩猟」や「犬ぞり」と一口に言っても、様々なバリエーション（スポーツ、生業、趣味…etc.）があるので、まずそうした違いから説明しなければならない。文化人類学専攻の学生への講義ではそのような経験は今のところないのだが、ある意味で現代日本における相当な少数派が集まってきているような気がする。

その点で獣医学を学ぶ学生の視点から「犬の人間化」に苦言を呈した村上氏の書評を読んで少し安心した。もちろん、獣医師業は（患者のみならず）飼い主に対するサービス提供としての側面もあるから、最低限の接遇研修が必要だと考えるのはもっともであるが、獣医学の実技研修を「現代の踏み絵」と感じるという学生の告白に触れたのは新鮮であった。各地域・時代ごとに多様な形をとりうる「犬の人間化」は、単純な類型論ではなく、犬に向き合う人（および、人に向き合う犬）のハビトゥス養成という観点で考えるべきだと改めて感じた。この点は本書全体を通じて「子ども」の視点、つまり社会化の議論が不在であるという伊東氏の指摘ともあわせて検討するべきだろう。なお、部分的な展開にとどまっているが、筆者はマルチスピーシーズ人類学の観点から北方アサバスカン社会の子どもや仔犬の社会

化を「共異身体化」という言葉を手掛かりに論じたことがある（近藤 2020）。今後この論点をより発展させていきたい。

松本氏の書評では、そり犬に対して殴ったり蹴ったりするとされたイヌイットの事例（菅原論文）に触れた上で、狩猟や運搬のために犬を使役する社会を扱った章を引き合いに出し、「犬の飼育にかかるコスト、あるいは愛情というコストを割きながら、なぜあっさりと犬たちを死なせてしまうのだろうか」という問いが提示されている。同じ節では、筆者の担当章（10章）も言及されているので、もしかしたら内陸アラスカでも本多勝一が描いたようなぞり犬への「虐待」とも取れるようなふるまいがなされているのではないかと思った人もいるかもしれない。誤解のないように言っておかなければいけないが、少なくとも筆者が滞在した時期（2010年代）の内陸アラスカ先住民社会における犬ぞりは、趣味・娯楽としての意味合いが強いこともあって、犬に言うことを聞かせるために暴力が用いられることはない。鞭も使用しない（本書245頁）。犬ぞりを利用した毛皮獣の罾猟が重要な生計手段であった時期（1910年代～1960年代）には、内陸アラスカ先住民は「生存や生活の重要な部分を犬に頼っている」と言えそうだが、筆者はその時期に参加観察をしたわけではない。

松本氏の発した問いについて筆者個人の見通しを与えるとすれば、内陸アラスカでは犬の命を奪うことが彼／彼女に対する最低限の配慮の表現である場合も少なからずあったのではないかと思う（すべてがそうだと言いたいわけではない）。というのも、ニコライ村での調査中、村に居ついた白人の一家（D家）が村を去る時に飼い犬を鎖につないだまま置いていったことがあった。もともと、D家の評判は良いものではなく、何かの罪を犯し居場所がなくなり、村に流れ着いたのではないかと噂する者さえいた。D家の飼い犬放置事件は「これだから白人は…」という諦めに似た呟きとと

もに村人の関心を大いに集めた。ニコライ村では人々の見解は一致していた。「かわいそうに。誰かが楽にしてあげなきゃ」。この元・飼い犬が哀れな声で遠吠えを繰り返すようになった頃、銃声が聞こえ、村に静けさが戻ってきた。

もし本当にその犬が「かわいそう」だと思うのであれば、誰かが引き取ってやればよかったのではないか。そういう意見を持つ人もいるだろう。しかし、今でも決して食料事情が良いとは言えないこの村では、誰もその名を知らない犬（D家夫妻は村人とほとんど話をしなかった）を養いたいとは思わなかった。内陸アラスカ先住民の民族誌の中には、何らかの理由で飼えなくなった犬を殺す人の姿が描かれている（Nelson 1986）。その場合、飼い主は自分の手では引き金を引くことが忍びないので、他の村人に頼んでいたとされる。ニコライ村の村人がD家に対して強い怒りを覚えているのは、どうしても飼い犬を飼いつづけられなくなったのであれば、みずからの手で引き金を引くか、それとも事前に村人に頼むかすべきであり、放置して餓死させるというのはあまりにも無責任なことであるからだ。

生業の一環として「犬を使役する人々」を一括りにした上で、彼ら／彼女らが「あっさりと犬たちを死なせてしまう」という前提で問いを立てるのは、いささか危なっかしいまとめ方のように思われる。少なくとも筆者が現地調査の中で出会った内陸アラスカの人々は、誰も名を知らない犬の切実なる訴えに十分に心を悩ませていたように見える（D家を除く）。もちろん、悩んだ末に結局「あっさりと」殺したんでしょ、と言われればそれまでのことである。最後に、伊東氏と松本氏が言及した「犬になって独白する」手法（19章）について私見を述べて、本稿を終えたい。端的に言えば、筆者は（犬の立場から独白した池田氏が）「擬人化の域を超越して本当に『犬になれた』のか」という点には疑問が残る」という松本氏の見解に賛同する。この手の議論になると、「人間

が動物の視点を十全な形で理解することは不可能であるからそのような表象の手法は独善的である」という良心的な人類学者による批判がすぐに飛んでくる。当日フロアからもそのような指摘があったのを記憶している。人間による動物の表象は常に「部分的な真実」（クリフォード 1996）にとどまると言えよう。

しかし、筆者は「他者の表象は可能か不可能か」の次元で論じるよりも、「その表象行為はどのような効果をもたらしたか」という観点から考えるべきだと思う。すべての「語り」は潜在的に「騙り」であると考えれば、シャーマニズム的实践としての他者表象を可能か不可能かの二択で論じるのはナンセンスである。ワタリガラスに「なって」踊る呪術師に「でも、君は人間だ!」と文句を言うのは清廉潔癖な宣教師くらいなものだ。むしろ、その実践が良いパフォーマンスであったかどうか、つまり、語り／騙りのパフォーマンスな効果を問うべきである。私は池田氏が犬になって語る／騙る手法をとるのであれば、さらに「犬化」を徹底させるべきだったと考える。19章の大部分は人間の視点から書かれたものであり、池田＝犬の独白は2頁に満たない。「読者も私も、その雄弁なメッセージに耳を傾けてみよう」（本書448頁）という前振りから、池田氏がショロ犬のずる剥けの首根っこをつかんで聴衆の面前に掲げた後、腹話術師の要領でしゃべるさまを思わず想像してしまった。犬（動物）の視点と人間の視点を読者が混乱するほど縦横無尽に交差させたり（cf. 多和田葉子『雪の練習生』2011年）、ショロ犬がダナ・ハラウェイを読むという設定で論文を綴ったりするという修辞法をとることもできたはずだ。筆者自身は犬（動物）の視点から文章を書きたいという欲望を感じることは今のところないが、エコクリティシズム（環境文学）とマルチスピーシーズ人類学の交差領域としての「動物の視点から語る／騙ること」を引き続き考えていきたい（cf. 山田×近藤 2019）。

【参考文献】

Nelson, Richard (1986) *Make Prayers to the Raven: A Koyukon View of the Northern Forest*. Chicago: University of Chicago Press.

クリフォード、ジェームズ(1996)「序論——部分的真実——」、クリフォード、ジェームズ+ジョージ・マーカス（編）『文化を書く』春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和辻悦子訳、pp.1-50、紀伊之國屋書店。

近藤祉秋（2020）「赤肉団上に無量無辺の異人あり：デネの共異身体論」『たぐい』Vol.2, pp.28-39.

山田悠介×近藤祉秋（2019）「対談 1 マルチスピーシーズ人類学とエコクリティシズム」シンポジウム「モア・ザン・ヒューマン」（2019年12月7日）、立教大学。